

令和4年度第2回ピースツーリズム推進懇談会 会議要旨

1 開催日時

令和5年2月28日(火) 14時00分から16時00分

2 会場

広島市中区地域福祉センター5階 大会議室1・2

3 出席者

懇談会構成員

団体名・役職	氏名
被爆体験証言者(平和記念資料館元館長、元国際平和担当理事)	原田 浩【座長】
広島県原爆被害者団体協議会 事務局長	前田 耕一郎
広島市立大学広島平和研究所 所長	大芝 亮
広島大学平和センター 准教授	ファンデルドゥース 瑠璃
特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima 理事長	渡部 朋子
特定非営利活動法人ひろしまジン大学 代表理事	平尾 順平
一般社団法人日本旅行業協会中四国事務局 事務局長	橋村 秀樹
一般社団法人ひろしま通訳・ガイド協会 会長	畝崎 雅子
広島市市民局国際平和推進部 部長	松嶋 博孝
広島市経済観光局観光政策部 部長	高石 実

(計10名)

事務局

広島市経済観光局観光政策部 観光プロモーション担当課長、課長補佐、主事 (計4名)

4 議題

- (1) 令和4年度下期の取組
- (2) ピースツーリズム推進事業に係る意見の整理
- (3) 令和5年度の取組(予定)
- (4) その他平和に関わる市の事業についての情報共有
- (5) 意見交換

5 公開・非公開の別

公開

6 傍聴人の人数

0名

7 会議資料名

資料 ピースツーリズム推進懇談会(令和4年度第2回)

8 発言の要旨

【議題について事務局から説明、平和記念資料館の発信力の強化について松嶋委員から説明】

(原田座長)

委員の中には、新しく就任した方もあるので、本川小学校の件について、懇談会発足当初のいきさつなど、補足をさせていただきたい。

ピースツーリズム推進懇談会の発足時に、平和記念資料館本館のリニューアル工事が開始されたが、その時点では、本川小学校平和資料館は土曜日・日曜日が休館だった。なぜ土曜日・日曜日が休館なのかという議論はあったが、平和記念資料館のリニューアル工事が発端となって、まずは休日も開館する方向で進めるべきではないのかという意見となった。松嶋委員の説明にもあったように、ここは学校施設なので、校内に一般の人が入ってくるのは難しいという意見もあった。そのような中で、当時の教頭先生から、本川小学校の中の施設というだけでなく、できるだけ多くの人に見てもらうような体制作りを考えてはどうかという意見をいただき、休日の開館の検討が始まった。休日休館のまま、平和記念資料館の本館がリニューアルのために閉館すると、旅行者は本館にある本来見学したい被爆資料展示物のほとんどが見学できない。東館の1階のごく一部の展示だけでは不十分だとの意見が多く、開設にこぎつけたという経緯もある。

それから、袋町小学校についても、私が現役の時に袋町小学校をどう残すかという議論が起こり、被爆建造物の保存制度を作り、保存の方向になった。資料館として開館したが、相当期間が経っているにも関わらず、展示内容について検証が十分にされていない。そういったことを踏まえた上で、まずは本川小学校と袋町小学校を対象に、話を進めていくことになった。

次に出てきたのが、幟町小学校の件である。幟町小学校は佐々木禎子さんの母校で、彼女にとっても幟町小学校の思い出が強いであろうし、地元の町内会や、当時の幟町小学校の校長の思いもあって、とりあえずは佐々木禎子さんのコーナーを作ろうということになった。それで当時の校長と議論していたが、校長が代わったことでトーンが下がり、話が進まなくなった。幟町小学校の場合、目の前に重要文化財の平和世界記念聖堂があり、すぐ近くには陸軍幼年学校もあったので、それらを一体的に見学できるようにできないかという思いもある。

また、別の機会に白島小学校の校長と、話をしていると、白島小学校でも被爆資料も含めていろいろな資料を保存しているが、それをどのような形で展開していくべきか悩んでいるという話があった。このように、旧市内の小学校は多かれ少なかれいろいろな資料を持っている。この懇談会でも意見を伺いながら、それらを連携し、将来的にはまとめていくというもの、一つの方向性ではないかと思う。被爆者の数はどんどん減ってきており、先般も非常に熱心に被爆証言をしていた方が亡くなられた。一刻も余裕がない時期に来ているからこそ、今できることをやっていくべきではないかという気持ちを持っている。平和推進課にも、そのことを伝えており、担当課長も危機感を持って努力してやってくれている。それが今回の本川小学校や、袋町小学校を整備し、平和記念資料館の附属展示施設として開館することに繋がった。こういった施設を教育施設の枠組みの中だけで運営するのは限界があると思う。専門家や学芸員を配置するなどにより、今後、より良いものを来訪者に見てもらえるよう整備してほしい。

それからもう一点、アラブ首長国連邦で開催された大規模なブックフェアにピースツーリズムの英語版とアラビア語版を作って参加し、多くの方に広島を思いを広げることができた。

まずは、これまでやってきたことについての意見を伺いたい。

(大芝委員)

座長がおっしゃったとおり、これまでのことと、これからのことを分けて話すのが良いと思った。ま

ず、これまでのことだが、事務局がまとめた資料の中で、聖地巡礼ルートの追加という話に非常に共鳴した。以前、瑠璃委員が平和についての視点を「広く」と「深く」に分けて分析していたが、「広く」という視点では、聖地巡礼はとても入りやすいテーマだと思う。特に広島市外の人にとっての入口としては非常に入りやすいと思うので、積極的に取り組んでほしいと思う。

もう一点は、被爆樹木巡りについてだが、いろいろなところを見ていくというのも良いと思うが被爆樹木を植樹するような取組ができないか。植樹は、それぞれの樹に対して能動的であり、当事者意識を持ちやすくなるのではないかと思う。私が以前住んでいた国立市で植樹をやっており、毎年ホームページで木の状況を更新してくれていた。そうすると、自分たちでやったという意識を持つことができ、とても良い取組だと思った。せっかく広島に来ていろいろなものを見るはずなので、なるほどという理解だけでなく、自分たちも積極的に関わることができる能動的な働きかけとして良いのではないだろうか。

続いてこれからのことで、是非、お願いしたいことがある。座長の話と共通するところがあるが、被爆建物や、被爆資料を保存する過程の中で、どのように保存してきたかというストーリーを残してほしいと思う。今ある被爆建物も、最初からそれが残るといことが決定していたのではなく、反対意見や、取り壊しの可能性もある中で、それでも残ってきて今日に至っている。そういったストーリーを残してほしいと思う。私は、建物がどうなっているかだけではなく、どのように残してきたかというストーリーが感動を与えられるのではないかと思う。また、それは広島に限った話ではなく、自然災害などの被災地にも当てはまることで、遺構の保存でも、必ず議論になることである。広島は、被爆建物の保存に際して、たくさんの議論をしてきており、その経験について被災地に伝えてほしいし、その話を被災地の方は欲していると思う。被爆建物の保存の経緯については調べれば分かることかもしれないが、被災地の方が入手しやすい形でこちらから発信してほしい。そういったことを是非、これからの取組に入れてほしいと思う。

(原田座長)

今の説明に少し補足すると、被爆50年の事業として被爆建造物をどう残すのかという議論があり、最終的に、半径5km以内の建物を中心として残すことに決定した。それは国も県も全く目を向けていなかったもので、広島市の独自事業として民間の建物については、当時3千万円の補助を行った。少ない金額ではあったが、今考えれば画期的な制度になった。そこからスタートして相当期間が経っているため、大芝委員がおっしゃったように、今後はどうあるべきかをもう一度考える必要がある。被爆建造物が少なくなってきている中で、今度はどう残していくか、あるいは選択して残していく必要も出てくるかもしれない。その整理をしなければならないと思っている。国立市は平和問題に非常に熱心な市で、広島市にもアドバイスなどを求めてきており、実際に行動に移している。

それから被爆樹木の件だが、渡部委員が非常に熱心にやっており、世界中に被爆樹木を浸透させるような仕事もしている。この懇談会でどこまでできるのかという議論はあるが、そういったところにつなげていくのも一つの大きな視点であろうと考えている。

(渡部委員)

先ほど大芝委員がおっしゃった、残していく人々の営み、その物語が大事という言葉に感動した。これからつながることでも良いと思った。是非、検討いただきたい。これこそまさに継承であると感じた。もう一つ感動したのは、通信病院に平和資料館という名が付いて平和記念資料館の分館の扱いになり、学芸員が関わって資料の展示を行っていくということである。こうやってパンフレットを4つ

並べて、様々な資料館があることを、旅行者に言えることを嬉しく思う。街を周遊して広島を体験していただけるということがパンフレットの地図を見ると一目で分かる。多様な人たちがおり、それぞれの気持ちでフィットする場所が違うと思うので、様々なところを巡っていただきたい。例えば、シュモールハウスにフィットする人、袋町小学校にフィットする人、それぞれの人がいる。もちろん平和記念資料館本館は中心にあるが、様々なところを巡ってもらうことで、広島に半日ではなく、1日2日と滞在していただくようになると良いと思っている。さらに、川の側に座ったり、あるいは小高い比治山に上がって広島を見たりと、いろいろな巡り方をしてもらえないかと感じた。また、修学旅行生には平和記念資料館などのパンフレットをセットで渡してほしいと思う。年齢によって選ぶ場所は違うだろうし、小さな子供たちはどこに行けば良いというのを、事前に選びやすい。もちろん全て見るのが良いと思うが、修学旅行の時間では難しいと思うので、いろいろなパンフレットをそろえることで、学校への配慮となり、結果的に学校側が選択しやすくなると思う。

次に、シュモールハウスについてだが、先日、小倉桂子さんと話した時に、オレゴン大学に行く時に必ずシュモールハウスのことを伝え、絵本になっていることも伝えると言っていた。なぜかという、原爆を投下した加害国のような気持でいる若い人に、あなたたちの国の人たちが広島に来て家を建ててくれたというのを伝えるというのは大切なことで、国と国ではなく、市民同士が助け合ったということは、一つの希望になると言われていた。そのことを皆様に紹介したいと思った。

それから、シャルジャ国際ブックフェアについて報告いただいた中で付け加えたいことがある。実は私たちもこのブックフェアに出展しており、とても大きな反響があった。以前、ジプチと南スーダンの青年と話した時に、ブックフェアというのはアフリカではとてもポピュラーであると言っていた。映画と本についてのフェアはどこでも大々的に開催され、様々なブックフェアに広島の情報を提供するというのは、多くの人が集まるそうである。シャルジャ国際ブックフェアにも当団体から絵本、映像、千羽鶴などをセットで提供したが、提供したものはいずれも返ってこず、いろいろなところに行ってしまった。ブックフェアの力というのは、私たちが想像する以上に大きく、中東・アフリカでは浸透しているのを感じ、この経験を活かし、別の国のブックフェアにも出展していったら良いのではないかと思った。

また、フォトコンテストやピースおこの取組も日常的にあったら良いと思った。メッセージや名前を書いたお好み焼を投稿してもらい、365日これに参加できるようにしてインスタグラムでみんなが見ることができれば「いいメッセージだな」とか「おいしそうだな」とか発展しそうだと思った。

それから被爆樹木に関してだが、以前、BBCが作成した映像があるのだが、これが世界中を巡っており、毎年のようにいろいろなところから問い合わせがある。また、英語版に続き、スペイン語版も作ったことから、南米にも映像が出回り、被爆樹木の存在が多くの方に知られてきている。平和首長会議やグリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブなどが被爆樹木の種や苗木を配付しているが、ノルウェーにある生命科学大学やオスロ大学のアンドレアスさんという樹木医も、国境を越えて被爆樹木の植樹や存在そのものに関しての意味付けや、教育的な素材としての関心など、様々な観点から注目を寄せている。一番すごいと思ったのは、被爆樹木はユニバーサルな言語であると言われたことで、とても大きなことだと体感している。

広島市では、いち早く平和推進課被爆体験継承担当の皆さんがカルテを作ったこともあり、そのカルテに沿って樹勢回復が行われており、そういう意味では大事に守られ、保全が始まっている。私は商業目的で被爆樹木を使うことは絶対にやってはいけないと思う。教育的に枝葉を使うことはあっても、ビジネスにすると絶対に切らなくて良い枝を切ることになる。そうするとかけがえのない命を傷つけてビジネスに走ることになる。G7広島サミットの関係でも何人も相談に来たが、G7広島サミットでは、

来賓に被爆樹木に会ってもらおうというのが良いのではないかと。また、被爆樹木の保全を今後も考えなくてはならないと思う。以前、植物園の園長に「有名になると木を痛める」と言われたことがあるが、それを考えながら被爆樹木に関しては、どう守って、その存在を知らせ、その意味について考えていくかが大切だ。

最後に一つだけ聞きたいことがある。旧市民球場跡地のにぎわい施設の構想があったが、これは誰のための施設なのか。なぜこれを言うかという、以前から夏の暑い時期に平和記念資料館に入れずに日射病と闘いながら列を成している入館希望者に対してちゃんと休めて、市民と触れ合え、少し落ち着いて平和記念資料館で見たり聞いたり感じたりしたことをかみしめられるような空間があったら良いという話をしていたが、そういった施設になると思うのか、聞きたい。

(橋村委員)

私が、皆様がこれまでやってこられた事業について感じることは、WEBサイトのアクセス、フォロワー数が増えているのは良いことだと思う。ただ、平均が11,381件というのはまだまだ少なく、10万単位のものがなければ、ちゃんと発信しているとは言い難いと思う。フォトコンテストは、平和学習などに興味がない層に、広島を知ってもらおうという意味で良いと思う。これはフォロワー数が上がるまで、ずっと継続していただきたい。

次にブックフェアのことで気になった点があった。アラブの人たちは、未だに広島が廃墟だと思っている人が多いということだったが、実際にインターネットでローマ字のHiroshimaを検索すると、ほとんどがグレーな部分、先にそういった情報が出てくる。平仮名だと出ないことを考えると、海外の人は未だに廃墟の広島をイメージするということだと思う。逆に言うと、広島が原爆を受けて廃墟になったということは、世界の人々にも広く知られているということである。観光業の立場からいうと、広島が原爆を受けて、広範囲な被害や十数万という被害者が出たことを学習した後に、復興した広島を訪れた時、人々の温かさに触れてほしいと思う。例えばアウシュビッツや真珠湾では、未だに加害国の行いについて、観光客に訴えているが、広島ではそういったことは一切なく、実際にアメリカの方が来られても英語で案内を行う。そういった姿勢から学ぶことがあり、平和の喜びというものを外に伝えることができれば良いと思う。これは当然、学ぶために広島に来てもらう必要があるが、広島に来ると、こんな元気がもらえるというものをさらに与えないといけな。それによってリピーターが増え、戦争に目を背けている方たちが広島に来るきっかけになるかもしれない。是非そういったことを意識して進めていただきたい。

それと通信病院や本川小学校、袋町小学校が平和記念資料館の附属施設になっているということだが、これをどのように、どの世代に、どう伝えるかということがある。若い世代と、親から戦争体験を聞いてきた我々のような世代では捉え方も違い、心に響く言葉も違うはずである。そうなると、伝え方も変える必要があり、せつかく残すのであれば、そういったことも考えるべきである。ただ、どの世代も感じ方の違いはあるが、平和学習をするためにこういった資料が必要であるため、しっかりと残していただきたい。現在も、自転車で平和のスポットを巡ることができるが、平和記念資料館の下に自転車に乗れる場所があれば、もっと利用しやすくなると思う。駐輪場や、台数の問題があり難しいことだと思うが、観光客は、まず、平和記念資料館を目指すと思うので、平和記念資料館を見た上で、「3km範囲の中でこういうところが見られますよ。そのまま自転車に乗って周ってみませんか。」という提案ができれば面白いと思う。観光業の視点で見ると、そういったプラスアルファの経験をしてもらい、さらに、それを広島の観光に結び付けることが今後大事ではないかと思っている。

(前田委員)

最初に、事務局はよくやっており、様々な方面にわたってPRを展開しているということは大いに評価できると思いながら聞いていた。資料にあったシャルジャ国際ブックフェアのことだが、これはどうやって知り、どうやって関わっていったのかを教えてください。それから、これまでの事業で様々な平和関連団体が関わっているが、以前と比べ、本当に進歩したと思いながら聞いていた。かつては、平和は食いぶちにならないと言われ、それで儲けることはできないと認識されていた。それが100%平和のことだけではないにせよ、平和に関わりながらでも収益を上げる、または上げようとしている。平和を伝えたいという意思を持ち、それで利益を上げることができるようになっていのはすごいことだと感じる。世の中の変化や、関係者の努力、市の後押しなど、様々な要因はあると思うが、それを大いに評価したい。私は被爆者団体に関わっているが、私の身の回りでも核兵器廃絶のための国際署名というものをやり、多数の署名を国内外で集めたが、その事務局の若者も、それを通じて生計を立て、暮らしていると聞き、世の中が変わってきていることを実感した。また、資料の報告を見て、改めて地元にも、そのような変化があるということを実感した。

それから、今後のことについてだが、G7広島サミットに関連して、平和推進課で事業を考えているようだが、海外から広島に来ているメディアに向けて、もっと積極的にアプローチしても良いと思う。メディアにこのピースツーリズムの中で取り上げている施設を巡るバスツアーのようなものがないかと思う。施設の紹介だけでなく、来ている間に、原田座長がよくおっしゃるめいぷる〜ぷの様なもの周遊してもらい、実際に広島を体験してもらえば良いのではないか。それぞれの組織の考え、様々な取組はしているだろうが、それぐらいはあっても良いと思った。

それと、大芝委員がおっしゃった能動的な取組につながるものとして、被爆樹木のことを話したと思うが、それに類するものを広島市でも行っていると思う。キョウチクトウだったか沼田鈴子さんのアオギリだったか定かではないが、あらかじめ申し込むと、修学旅行で来た学校に渡し、それを持ち帰って植樹することができる事業であったと思う。今も継続しているか確認した上で、そういった取組もピースツーリズムの枠組みの中で取り組むことができるのではないか。はだしのゲンの関係で麦を渡して、実った麦の種を返す取組など、様々な団体がいろいろなことをやっていると思うので、可能な部分は協力していけば良いのではないかと思う。

(瑠璃委員)

素晴らしい活動をされてきたと思う。前田委員がおっしゃったように、ピースツーリズムでここまで多岐に渡った活動ができるようになり、本当に頼もしい限りである。中でもシャルジャ国際ブックフェアについては、渡部委員もおっしゃったように、このような機会があれば是非、情報共有を徹底して、より多くの広島の教育機関や市民団体が参加できればと思う。

松嶋委員から、平和記念資料館の発信力強化の取組について説明があったが、広島大学が平和記念資料館と共催で毎年行っている市民公開講座で、滝川館長から取組についてお話いただき、多くの反響があった。特に素晴らしいと思ったのが、今まで点であった施設が線につながることだ。本川小学校、袋町小学校からシュモアハウスに行く途中には、爆風を受けた壁の一面が残っている広島赤十字・原爆病院や御幸橋もある。それ以外の戦跡なども含めて、さらに、点から線へ、線から面へとピースツーリズムのスポットをつなげていければ良いと思う。また、シュモアハウスまで行くのであれば、裏手の皿山の慈仙寺を見ていただきたい。慈仙寺には被爆した六地藏尊などもあり、どれだけ被害があったかを

訪れる人たちに感じてもらえるのではないかと思う。同時に、皿山の上から、映画「この世界の片隅に」の主人公すずさんが広島海を見る場面になんで、聖地巡礼ともつなげていけると思う。

それと、大芝委員が、今後、被爆建物をどのように残していくかを考えた時、これまで守ってきた道のり、歩みについてのストーリーを残したいとおっしゃっていたが、深く賛同する。ピースツーリズムのウェブサイト、保存継承の語りや載せていくというのも一つの手ではないかと思う。同時に、被爆建物を残した人たちのことを紹介した冊子のようなものを作り、そこを巡ることも可能だろう。今では世界遺産で、あって当たり前と思われている原爆ドームでさえ、実は紆余曲折を経てきたことも、G7広島サミットで訪れる方たちに理解してもらえるような仕組みを作れないかと思っている。「花火を見たい」、「灯籠流しを見たい」、「遊びたい」、と、ふらっと訪れた人が広島を肌で感じて、深堀したくなり、浮遊層の人たちがどんどんリピーターになっていく。そして面としての広島を理解してもらえるようになる。さらに自分事としての広島になり、もう一度行きたい広島になることを目標に、ピースツーリズムの活動を進めていきたいと改めて考える。深堀する再来客を増やすには、被爆建物を巡ると同時に、各地に点在している被爆樹木や、ストーリーを用意しておき、自分で見つけてもらえれば効果的である。専用のMAPを作り、ルートにできないかと思っている。また、被爆樹木を痛めない形で宣伝する方法があれば私も教えていただきたい。

被爆樹木といえば、音楽との関連も興味深い。最近の研究で改めて音楽が人の心に与える力が見直されている。実際、比治山で亡くなった方が、最後に唱歌を歌った記録や証言もある。楽器は特に被爆ピアノが有名だが、広島大学では枯死した被爆樹木を再利用し、ヴァイオリンやチェロにした。そのまま眠らせていてはもったいないので、これらを集めて被爆樹木や被爆建物などに絡めたイベントも考えられると思う。広島大学では、昨年秋にレストハウスで被爆者の森富茂雄さんの鉛筆画47点の展示とセミナーを行ったが、音楽と絡めることもできたかもしれない。この展示会は、皆様の協力により、最初の週で3,000名の来場があった。このように、既存のものを見直し、組み合わせることによっていろいろなイベントを展開していけるのではないかと思う。

また、周遊についてだが、橋村委員からぴーすくるの話や、その他にもめいぷる〜ぷの提案があった。確かに移動手段があれば、もう少し足を伸ばしてみようということに繋がる。ぴーすくるについてはスーパーやコンビニエンスストアなどでも見かけるようになり、買い物でも気軽に使えるようになってきている。ただ、平和記念公園の周りには少ない。平和記念資料館の横にもあるが、台数が限られているため、今後の課題だろうか。

最後に、G7広島サミットに向けて、ピースツーリズムを絡めて展開していくということだが、気になっていることがある。情報を発信した後、投げっぱなしになっていることがあまりにも多く、もったいない。情報発信から訪問客との関係構築までを考えたい。例えばQRコードでアクセスする簡単なアンケートのようなものが考えられる。例えば広島の被爆建物に興味を示した人が、何を求めてどこから来たかというような情報を得られないかと思っている。G7広島サミット以降で観光客の増加が見込まれるので、スマートフォンですぐに回答できるようなフォームを作り、アクセス用のQRコードを、観光関係のちらし・ポスターの隅に掲載し、訪問者の嗜好やニーズ情報を得られるような仕組みを考えてもらえれば非常にありがたい。それにより、もう少し広島を知りたくなった人に、適切な資料を提供しやすくなる。そういったことで、訪問客と受け入れ側の相互の文化の理解や、関係構築が可能になっていくと思う。

ピースツーリズムの意義は、被爆体験とその後について、現地で理解してもらうことにある。核兵器を使用しない、させないようにするためには被爆の実相についての理解と、核兵器への恐怖感が必要で

ある。もちろん核兵器の廃絶が私たちの最終目標だが、核兵器が既にこれだけ存在する現状でまず何ができるか考えねばならない。実相を伝え、核の恐ろしさを伝えた上で、人々がどんな思いをしたか、今もうずく傷を抱えながら、復興してきた町の生命力を現地で実感してもらうことが大事だと思う。その経験が核のボタンに手をかけることを躊躇させる。そのためにも、メッセージを発信していき、ヒロシマの記憶を共有する人々が核兵器の使用を不可能にするようなピースツーリズムになればと願っている。

(平尾委員)

前提として先ほど皆さんがおっしゃったように、コロナの状況下においてこれだけの成果が出ているというのは、すごく頑張ったのだと思う。特にスタンプラリーなどは、コロナ禍で移動が制限される中、なんとか街の中で周遊してもらうために、様々な苦勞をされた結果ではないかと感じた。徐々にコロナに対する考え方が変わってきているので、これからインバウンドが戻ってきて、ピースツーリズムの3年間の下積みがしっかりと成果に繋がっていき、根底の部分を作っていけたら良いと思う。

私からは、13 ページの意見の整理の中にある、懇談会についてという項目について発言したい。前回、懇談会に若い世代がもう少し入っても良いのではないかという話をさせてもらった。昨今、メディアをにぎわせている平和学習の副読本におけるはだしのゲンの問題を見ても分かるように、世代ごとのごとの捉え方、考え方が異なることは仕方ないことだと思っている。特に平和のような、概念について話す時に、国や文化や宗教と並んで、世代というのは、捉え方の違いが出やすい部分だと思う。そのような中であって、ピースツーリズム推進懇談会は、委員の方々の多様な視点や考え方を知ることができ、私は大変勉強にもなっている。ここに若い世代を懇談会に招聘すると、原田座長をはじめ、いろいろな世代の方々がどのように考えているのか、どんな思いを持っているのかを学ぶ機会にもなると思う。そのように考えると、やはりもう少し若い 20、30 代の方がここに入っても良いと思う。若い世代にとっては刺激的で、新たなつながりへのきっかけにもなるのではないか。この懇談会で取り上げることは、官民関わらず、市民の活動もたくさん議題に上るため、そういったことを横断的に、学ぶ場としての懇談会という位置づけもあるのではないかと思う。

最後に一つだけ、前田委員が平和をビジネスにすることに対して、昔は食えるものじゃないと言われていたとおっしゃっていた。まだ食べている人は少ないと思うが、ちゃんとお金が回ることで関わりやすくなったという若者もいると思う。一時期と比べ日本の経済状況が決して良くない中で、平和活動においてもお金を回していくことは、若い方を中心に多様な人が、責任を持って継続的に関わるためには必要なことだと考えている。このことに関し、委員の皆さん個人、あるいは世代でどう見ているのか、とても気になっている。昔から「平和で飯を食うな」という意識が根底にあったが、前田委員が先輩世代の代表というわけではないが、そのことに対して寛容だということを楽ししく思った。他の皆さんもどのように捉えておられるのか気になったので伺ってみたい。

(畝崎委員)

皆様の話を聞いて刺激を受けた。特に大芝委員が発言した、残った理由についてストーリーを残してほしいということは、私も以前から思っていた。例えば、松江城の入口には、熱心に寄付をした町民の名前や、松江城が残った理由について説明がある。こういったものを見ると、本当に良いなと感心する。広島の人には原爆ドームを残したが、誰がどんな思いで残したか、そういった背景について、是非知りたいと思うし、原爆ドームに限らず、平和記念公園や様々な施設についても当てはまることだと思う。そ

の場合に、まず一つはウェブサイト上でストーリーを紹介することができる。例えばシリーズとして長岡省吾さん、浜井信三さん、蜂谷道彦さん、谷口吉生さん、丹下健三さん、村野藤吾さん、バーバラ・レイノルズさんなど、原爆投下から復興に関わった人たちについて紹介するといった方法を取れる。また、そういった方々のストーリーを平和記念資料館の学芸員などの協力を得ながら、新たな文学的な観点からまとめた冊子をシリーズで作るのも良いのではないかと思う。こういったことをうまく活用している自治体が萩市である。それ以外にも松江市や、盛岡市にも例があり、盛岡市の先人記念館というところでは、一冊 500 円くらいの薄いもので、米内光政などシリーズでたくさんある。以前のように複雑な文章は読めない人が増えており、分厚い本は読まれたいと思っている。そのため、小学校 5、6 年生向けに合わせて作ることでそういった大人にも親しみやすく、海外の人にも翻訳しやすいものを作る必要があると思う。このようなシリーズを、例えば、村野藤吾と世界平和記念聖堂など、建設までにいろいろ物語があるので、そういったことを客観的に書かれたものがあれば良いと思う。

私が経験したことだが、平和記念公園で、アメリカ人の祖父と 15 歳の孫の通訳ガイドをしたが、その方は、孫に広島を感じてほしいということで、最大 6 時間のガイド依頼を受けた。こういう人がいるのだなと思いつつ本川小学校に行ったが、市民でもここが平和資料館としてほとんど年間を通して開館していることを知らない人が多いと思う。今回、平和記念資料館の附属施設になっているということで年末以外いつも開いていて、見学できるということ、さらに周知してほしいと思う。資料として見学するだけでなく、現場に足を踏み入れるというのは、大変感じるものがあるため、多くの人に入館してほしいと思う。ただ、そこで手に入るパンフレットの情報が少なく、数の問題で一団体一部しか渡せないとのことであったため、そこは改善の余地があると感じた。今はネットで調べればたくさんの情報があり、高画質の映像や動画が手に入るにも関わらず、直接広島に来てくれた旅行者を迎えるのは、説明が書かれた QR コードではなく人間だと思う。是非、旧日本銀行広島支店などを拠点として整備し、職員やボランティアを配置した上で、どこから来たのか、何をみたいのかという話や、開催されるイベントの情報を紹介できるような場所ができれば良いと思う。例えば、被爆樹木と平和大通りの供木運動などのレガシーを組み合わせることで、広島の悲しい過去と、現在や未来のことについて、一緒に見て回る提案など、そういったことができれば良いと思う。海外の人たちにとっては、私たちが思っている以上に、広島は破壊しつくされた町という記憶が定着している。つい最近も、ガイド協会の関係者が、京都に来ていた外国人旅行者に尋ねたところ、広島は悲しい場所であると認識しており、行くことに躊躇するという内容が議事録にあった。広島は、被爆した都市であると同時に、破壊から再生したレジリエンスのある人たちが住む街という発信を、これからも行っていく必要があるのではないかと思う。そのためには被爆建物だけではなく、そこに谷口吉生さんが平和の軸線を意識して作った中工場のような存在をアピールしていくのが良いのではないか。

(松嶋委員)

皆さんの意見、とても参考になった。その中で、多数、質問があったので、できる限りこの場で回答したいと思う。まず、大芝委員からは被爆建物、被爆樹木についてのストーリーが大事で、ニーズの掘り起こしも必要であるとの意見をいただいたが、全くそのとおりである。この件についての情報だが、昨年 11 月時点で被爆建物は登録数が 86 件、被爆樹木が 160 本、それから橋梁については 6 か所あるという現状で、我々としては、こういった被爆建物を長く保存していただきたいと思っている。ただ、中には民有のものがあり、維持管理が困難ということは確かにある。そこで、十分とは言えないが、毎年予算を組み、その内の半額を建物の修繕・補修費用に補充することで、計画的な保全に向けて取り組ん

でいる。

それから被爆樹木については、先ほど渡部委員からもあったが、被爆樹木の健康診断や、場合によっては樹勢回復の措置をとっている。被爆者と同じように、被爆の惨状を伝え、ストーリーを持って皆さんに理解してもらえそうな形で、今後も残していきたいと思っている。

それから、ストーリーやニーズの掘り起こしに関しては、資料の14ページにあるように、G7広島サミットを契機に情報発信の強化に向けて動いており、市外や海外からの来広者を対象として被爆建物や被爆樹木を巡ってもらうことを考えている。PRも兼ねて少し紹介すると、これまでは広島市が主体となり、被爆建物や被爆樹木を巡るということを年3回程度行っていたが、これでは回数が十分ではないということがあった。そのため、G7広島サミット中やG7広島サミット後に、インバウンドを含めて多くの方が広島を訪れる機会があるだろうということで、来年度の予算で議決前ではあるが、民間の活力を活かしながら、新しい視点での被爆建物、被爆樹木巡りができないかということを考えているところである。具体的には、本日、公示が出たので、興味や関心がある方がいれば紹介していただきたいが、年間300万円の予算を組んで、日本語によるツアーを年に10回以上やっていただける事業者を探している。また英語によるツアーができる事業者も探している。プロポーザル形式による募集になるので、内容の新規性や独自性、今までと違う新しい着眼点が大事になってくるが、これまでやってきた経験や実績もいろいろと見た上で決めていきたいと考えている。スケジュールは、3月7日まで質問の受付をしており、提出期限は3月14日となっている。我々がやりたいというような御意思をお持ちであれば、是非、手を挙げていただきたいと思っている。こういった民間事業者と一緒にやっていく中で、ニーズの掘り起こしを行い、新しい着眼点や新しい伝え方を発見していきたいと思っている。

それから、先ほど紹介した平和記念資料館の附属施設のことについて補足をすると、原田座長から将来的には全ての小学校でという話があったが、それに向けてはいろいろと課題がある。附属施設にすることを考えた時には、学校生活に全く影響がないところでできるという物理的な条件が発生する。今回、附属施設になった二つの小学校は、資料館部分が物理的に学校と分離しているため、それをクリアできている。また、今回の二つの小学校は被爆建物であると同時に、将来的には、史跡に指定したいと考えているようで、文化振興課が文部科学省に申請している。現在の史跡は原爆ドームだけであるが、原爆ドームを特別史跡にした上で、新しく史跡を6つ入れたいと文化振興課は考えており、その中の二つが本川小学校、袋町小学校であった。そういった意味で、原爆の悲惨さを強く訴える力を持つ、貴重な被爆資料であるという意味で、我々もそこに関与して、しっかりと（公財）広島平和文化センターと連携しながらやっていくということを考えている。また、（公財）広島平和文化センターにとっては、新しい施設が増えることで、学芸員を新たに配置するなど、人員の配置も必要になってくる。それから公の施設になるということで、常に開いている施設にしなければならないため、常駐の人も雇う必要がある。そういったところも予算を組み、将来的に令和6年、令和7年に展示できるようなスケジュールを見越して人の配置をしていくということを考えているところである。

次に渡部委員からひろしまゲートパークプラザの話があったが、調べたてみると、都市機能調整部でやっており、ここは、いわゆる中央公園の見直しの中での位置づけで、イベント集客ゾーンということになりそうである。平和記念資料館とは直接的な関連はなく、どちらかというと、平和記念公園に訪れる観光客を引き付けて、市内の回遊性を図る位置づけの場所になりそうである。平和記念公園の中でのことであれば、国際会議場1階の図書コーナーがあった部分をカフェスペースにし、G7広島サミット前の営業開始を目指して準備していると聞いている。プロポーザルだったようだが、地元の株式会社モーツアルトが最優秀提案者になっている。十分ではないかもしれないが、こういったところが平和

記念公園の内部の憩いの場として利用できるようになる。

それから、橋村委員から、自転車を使つての周遊について話があったが、現在も、平和記念資料館の前にピーすくろのポートが設置されている。それから国際会議場の前にもポートが用意されているが、十分な台数が日々充当されているかという点、足りない時もあり、不十分と感ずることもある。平和記念資料館に加えてシュモアハウスと本川小学校、袋町小学校の3施設にもポートがあれば周遊性が高まり、特にシュモアハウスは公共交通機関では行きづらいとこなので、自転車での周遊が有効であると考えている。場所も探さなければならぬが、ポートの設置も含め考えていきたい。

それから、畝崎委員から提案があった冊子について、「ヒロシマの『もの言わぬ証人』たち」という冊子を平和推進課が1,000円で販売している。市内の被爆建物と被爆樹木についての簡単な背景や被害の状況について記載されており、11か所をエリアに分けて周遊の提案なども行っている。薄い冊子ではないが、こういったものも御活用いただきたい。

後は、平尾委員から平和とビジネスの話があったが、これは個人的な感想ではあるが、若い方が平和の関係に参加してもらうには、参加しやすい環境を作るというのが大事だと思う。その上で、継続性を持ってもらうこと、それからどれだけ時間を割いて専念できるかという話になってくると思うので、その解決策の一つとして、程度にもよると思うが、無償ではなく、経費のようなものをもらいながら継続していくというやり方も、一つのやり方ではないかと思う。

(高石委員)

今日は貴重な御意見をいただき、御礼申し上げたい。いただいた意見をどのように反映するかという視点で話を聞かせていただいていた。現在、コロナ禍で観光動向が大きく変わっており、インバウンドが減り、観光客も減っているが、最近では復活の兆しを見せている。実は、修学旅行者数は、昨年1年間を見ると、コロナ前の2019年度の数を上回っているということで、かなり回復している。ただ、中身を分析すると、小学生は減っており、中学生は同程度、高校生が増えているという形が見て取れる。ピースツーリズムで施策をしていく中で、受け皿の整備をきちんとしていくという時には、こういった動向をどのように読み解いていくかが大切ではないかと思っている。コロナが終息すれば2019年度のような状況に戻っていくことが想定されるが、そうした中で、平和というコアな部分の意味合いを保ちながら、旅行の楽しさをどのようにミックスしていくか、その境界線をどこに設定していくかというのが、非常にデリケートで難しい問題であると受け止めている。広島に来られる方は、平和についての学びを求めてこられる方がいる一方で、レジャーを楽しむ観光地として、他の県と比較の上、広島に来ている方もいる。そうした方に、こういった形で平和を身近に感じてもらい、どのように受け止めてもらうか、どのように届けていくかが大事だと思う。非常に難しい命題だが、こういったことを常に考えながら、各施策を検討していくことが大切だと改めて感じた。

(原田座長)

皆さんの話の中で出てきたように、東日本大震災の関係者は、広島市の被爆建造物はどうやって残したのかということに非常に興味を持っていた。また、広島赤十字・原爆病院（原爆病院）の話も出たが、この病院の場合も様々な経緯がある。病院側の思い、平和団体の思い、市の考え方を踏まえ、結果的に今の場所に残したが、心残りもあった。ところが、各地から訪れる人たちの感想を聞いてみると、このような残し方があるのかという意見が多かった。残し方そのものも大事で、こういった形が良いのか検証することが必要ではないか。

それから、今はいろいろな形で被爆証言が出てきて、来訪者を増やす努力もあるが、被爆証言をできる人が減ってきている。今からはどんどん減っていくため、いつまでできるのかというのが大きな課題で、平和推進課の担当課長もいろいろな努力をしてくれている。伝承者は被爆者の体験をしっかりと伝える必要があるが、自己主張のために被爆伝承活動を使われる可能性がある。今後、伝承者の指導や研修も、より必要になってきており、担当も理解してくれている。

それから、松嶋委員から施設が増えるのは良いが、職員など、人の問題があるという話が出た。それは当然あると思うが、ここで話をしておきたいのはピースボランティアをもう少し活用できないのかということである。メンバーもそのことを望んでいる人も多くいる。

それから、音楽と広島に関連についてだが、楽器の一人当たりの購入金額は広島が全国で第一位という記事を読んだ。理由はよくわからないとのことだが、音楽大学もあり、プロの楽団もあるということだから、それだけの素地を広島が持っているということだと思っている。ピースツーリズムの一つのテーマとして掲げた平和と文化をどう融合させていくかということもあると思う。文化ということであれば、現代美術館が近くリニューアルオープンの予定であり、あれだけの期間を経て改修をしたのだから、どのように平和と文化が融合した施設として展開してくれるのか、期待している。これもまたオープンした段階で皆さんにご意見をいただきたい。

それから、ひろしまゲートパークプラザの話題が出たが、懇談会の当初の提案で、来訪者と市民の拠点施設がほしいというのを常々言っている。しかし、拠点施設ができていない。国際会議場にもカフェスペースができると松嶋委員が言っていたが、やはり拠点施設をどういう形で今後展開していくかということも、我々の課題の一つではないかと思っている。おもてなしの心というの、懇談会の当初のまとめとして、市長に報告した中にある。いかに広島にお見えになる方に、おもてなしをするかというのが、リピーターにつながり、結果的には広島の活性化にもつながるテーマである。そういったことをしっかりと確認をしながら方向づけをしていかなければならない。

(前田委員)

この懇談会にもピースツーリズムという名前が付いており、フォトコンテストにもピースという言葉を使っていると思うが、ピースデイズなど、いろいろなところでピースという言葉を使うと、あまりにも定番化しすぎており、平和を安易に扱っている感じがする。よく吟味していただきたいと思う。

それともう一点、被爆樹木の再利用について渡部委員は慎重であった方が良いとのことだが、私は被爆樹木の再利用に決して反対ではなくて、やって良いのではと思う。本来の樹木を痛めないようにということがポイントだと思い、そのように受け止めているが、そのような理解で良いか。

(渡部委員)

それについてはいろいろと議論をしたが、一度商業ベースに乗ってしまうと、木を痛めずにそのままにしていくというのは、人間は欲の生き物なので難しい。これは明らかだと思う。人間は年を取るので、被爆樹木を広島の宝としてずっと守っていくことを考えれば、商業ベースのものにしてはいけないと思う。リサイクルであるとかいろいろな考えがあるとは思いますが、例えば木を再利用するのは、教育的な場合に限定するなどしなければ、収益を得ることに歯止めが利かなくなり、いつの間にか誰かが許可なく木を切って使うという可能性がでてくるのではないかと思う。お金がたくさんあれば木が元気になるわけではなく、木が元気になるのは人々の愛情だと私は思う。千田小学校でカイツカイブキを使い、パンフルートを作ったが、これは枯死したもので、こういった利用の仕方はあると思うが、被爆樹木を別

の使い方をする時に、例えばそこで、皆に諮るというようなシステムも必要になってくるのではないかなと思う。

それと先ほど平尾委員がおっしゃったが、平和で飯を食うことについて意見を聞きたいということについて、資料に出てきたような若い世代の人たちは、よく頑張っていると思うし、新しいステージに世界を開いていると思っていて、私は嬉しく思っている。ただ、やっている人たちに時々立ち止まって本当に私たちは、十分なことをちゃんと伝えられているかということ振り返ってほしい。また、そういう学びの機会を皆さんの中で共有していく場があれば良いと思う。新しい知見や経験を共有し伝え方を考えるグループや、学びあう場など、若い人たちのコミュニティがいるのではないかなと思う。その上で、自分たちの生業になる、生計を立てるといのはあって良いと思う。一番必要なのは、平和を生み出すために活動している人がそれを生業として続けていける環境であり、それは広島にも、日本にもない。I CANを見ているとよく分かるが、各国から来た関係者が、なぜないのかと驚く。一生懸命やっていた若い世代の人が食べていくために辞めなければならない。食べていくのも難しく、身を切るような思いをしていたり、病気になってしまったりという話を聞く。それは私たちの責任だと思っていて、そういうものを日本に、広島に作りたいたいと思っている。(公財) 広島平和文化センターが今そうなので指摘させてもらった。そういう場所を作っていくことが広島の目指す恒久平和を次の世代につないでいくことになるのではないかなと思う。それからもう一つ。南海トラフなど、何かあった時に貴重な資料を今の資料館で守ることができるか考えないといけないと思っている。

(瑠璃委員)

松嶋委員にお聞きするが、海外からどんな人が来て、その人たちの興味は何か知りたいと思っている。それを将来的に反映した取組ができればと思う。海外からの観光客がなぜ広島に来て、何に興味があるのかアンケートなどで調べる方法を企画されているか。例えば配布物や説明書きにQRコードを付けるなどで情報収集をして、分析ができると思うのだが。

(松嶋委員)

アンケートは実施していないが、入館者がどういったリーフレットを使っているか、あるいはホームページのどこのページにアクセスが集中しており、旅行の前後で、どういった内容に関心があるかという情報は数字としては分かる。

(瑠璃委員)

それをG7広島サミット期間中やG7広島サミット後も継続的に情報を収集していくことができればと思う。国内外問わず、意見や興味の度合い、また、その人たちがどこから来たのか、そういった分析を行いたい。

(松嶋委員)

数値はある程度分かると思うが、分析するところまでは(公財) 広島平和文化センターもしていないと思う。今の視点は非常に大事だと思うので、アクセス数以外にも分析をして、より良い情報発信ができるかというところで活用できると思うので、(公財) 広島平和文化センターにも話しをしたいと思う。

(原田座長)

最後に瑠璃委員から伝えたいことがあるとのことなのでお願いしたい。

(瑠璃委員)

最近、広島・長崎に関して、海外で新しい動きが出ている。「人新世」の考え方もそうだが、核兵器の脅威を環境破壊、人類への脅威として捉え、被爆の実相の記憶継承を世界の問題として考える動きである。たとえば近代美術を介した試みでは、「Topologies of Air (空の地政学)」という展示会がバーレーン、トロント、トゥールーズなどで開催され、多くの動員があった。私も2022年秋に展示会で現地取材した。被爆の実相に関する展示で原田座長も登場されるフィルムでは、小学生から高齢者までの一般客が年齢や背景の違いに関わらず、一緒にそのシーンを見ていた。涙を流す人もあった。

展示会では、「被爆の記憶を浸透させて、核使用を抑止する」という表現を使っていた。いわゆる「核抑止(相互的な核兵器使用の可能性による威嚇で相手を抑止すること)」でさえも、「核の脅威」の認識がなければ全く機能しない。ところが、その認識が薄れつつある今、核戦争の可能性は高まっている。だから、被爆の実相・被爆体験の記憶を、遠い過去の歴史ではなく、自分達の未来を左右することとして継承し、「核の脅威の記憶を植え付け、広く浸透させる」ことで、核兵器使用を抑止する「記憶の抑止力」を高め、核廃絶につなげていくということだ。地味で長い道のりだが、長年被爆者が発信してきた声は、核兵器使用を躊躇させる思考を広めてきた。それを薄れさせてはいけない、地球全体の問題として、生存を左右する環境問題として、今こそ被爆の記憶を広く浸透させねばならない、という信念を表現した作品だ。

視聴者から、「広島の皆さんが、80年近く経った今でも広島の実相を伝え続ける意義や力について、広島に行って知りたい」という意見があった。来て学んで帰るだけではなく、新しい広島、躍動する広島を同時に見て、「生きる力の源がどこにあるのかを知りたい」という声もあった。世界のこうした催しでピースツーリズムを紹介すれば、効果が期待できる。

この調査の分析はいずれ共有するが、まずはそういった新たな動きがあることを伝えたい。たとえば、この展示を広島に誘致しようと思うが、広島大学だけではなく、可能であれば、興味がある方・団体と協働できればと思うので、是非、後ほど皆さんの意見を伺いたい。

(事務局)

渡部委員から、ひろしまゲートパークプラザの利用について質問があったが、イベント等がなければ屋根付きの広場で、修学旅行生が昼食会場として使用できることになっている。

また、皆様から関心を寄せていただいているシャルジャブックフェアへの出展については、新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金を利用した補助金を使い、株式会社ジェイリンクスが企画したものであり、ピースツーリズム推進事業について取材を受けたが、大変反響のあるイベントであると認識したので、今後もこういった機会があれば活用したい。